

# ユカラのヒロイン

## —英雄叙事詩の比較研究試論—

荻原眞子

### 1. はじめに

アイヌの「ユカラ」とよばれるジャンルには、「カムイユカラ」（神譜）と「人間のユカラ」があり、後者がいわゆる英雄叙事詩として広く知られていると言つてよい。ただ、「ユカラ」が「英雄叙事詩」を指すのは一部の地域、すなわち、胆振、日高地方であつて、「英雄叙事詩」に対応するジャンルの名称は地方によつて異なつてゐる。胆振から渡島地方では Yaierap, Yairap' 十勝、釧路、北見などの道東部では Sakorpe' サハリンでは Hauki' であるが、Hauki' は日高その他にも流布している〔久保寺 1977: 24〕。

のうち、胆振、日高の沙流地方に伝わるユカラが金田一京助によつて「発見され」〔金田一 1931: 31〕、アイヌのホメロスと呼べるワカルパ翁をはじめ幾多の伝承者から筆録がなされた。その後には伝承者金成マツが自ら書きとどめたユカラが金

田一京助の和訳注釈がつけられ『アイヌの叙事詩 ユーカラ集（I-X）』（ただし、Ⅳ、Ⅴ卷は金田一筆録訳注）として出版されるに及び、ユカラのテキストはわたしたちにも親しめるところになった〔金成筆録・金田一〕。以降、ユカラのテキストの出版は根気よく続けられてきているが、そのテーマ、構成、登場人物、文体すなわち語り口など内容にわたる考察は未だ十分にはなされていない。その理由はいくつか考えられるが、一つには上記のように北海道、サハリンをふくめ英雄叙事詩とみなされるジャンルが地方によりさまざまに異なつてゐることと、各地方のテキストの収集状況が比較研究できるほどには十分でないことが挙げられると思う。それだけにユカラ研究にはまず、方法論を考えなければならぬ。

かつて、金田一をしてアイヌのユカラは世界の三大英雄叙事詩にも比肩すると云わしめたが、そうだとするなら、ユーラシアばかりでなく世界的な広がりをもつ英雄叙事詩というジャンルのなかでアイヌのユカラはどうに位置づけられるであろう

うか。それを明らかにするための比較研究の試みとして、ここでは、ヒロインを取り上げ、アイヌの英雄叙事詩のテキスト全般についてではなく、金田一の手になる日高地方のユカラのテキスト一篇を対象として考察してみたい。ここに認められるヒロインの特質が、他のテキストや他地域の伝承について果たしてどこまで普遍性をもつものなのか、ヒロインを手がかりとすることによって広くユーラシア諸民族の英雄叙事詩を比較検討する見通しが得られるかどうかということを探つてみたいと考えるからである。

## 2. 英雄叙事詩ユカラについて

金田一はユカラのテーマについて、次のように解説している。

（従来「ユーカラ」と表記されることが多かつたが、本稿では引用を除いて「ユカラ」を用いる。）

1) 主人公はシヌタップカのトミサンペツのボイヤウンペpon yaunpe（年少なる本土人）、孤児。「父母の死の謂は物々交換に

赴いた途上、樺太で陸から招かれ：酒の上のことばが騒乱を惹起して、父が乱軍に斃れ、母は子を神々に祈つて棄てて、夫のあとを追う」とあり、「その先是色々に分かれても、ここだけは多くのユーカラに共通した筋である」。

### 2) テーマ

A A-1 ただ一人の肉親の兄カムイオトプシが、この弟の行方を尋ねて、到るところ「知らぬ」と答える村を斬殺して過ぎる。

A-2 弟にめぐり逢つて、知らずに刃を交え、互いに相手の強さに驚きつつ戦う。

B イリアッドの黄金の林檎のような、皆が欲しがるもの競争となつて、その獲得が禍根となり、事を生じてい

く。アイヌでは黄金のラッコや黄金の魚を諸英雄が欲しがつて争い、ボイヤウンペの有に帰すが、「これを妬む諸部落が一味して奪略に来る戦に端を発して、所謂幾戦記の戦物語をなす」。

C 「实际上、昔の生活にいくらも有り得た獵場の獵の争、それが嵩じ畳まつて大きな騒乱となり、以て幾戦記の長物語を産んでいる。」

「ユカラは英雄説話であるから、戦争が勿論その内容の主たる素材であるが、今一つ観のがせない副素は美女の取り合せである。孤児としての生立に始まって、敵中から花のよくな美少女を得て凱旋する。」

「第四の型として付け加えると、結婚そのものが、物語の事件の起始を成すものが少数ある。—その際の結婚は、親類付合いの間の、面も纏袴の中からの約婚の女で

」のようすに金田一はユカラに登場する女性について「副次的な位置づけをしていいるが、この見解は恐らくは金田一が実際に聴き、採録したすべてのユカラを踏まえた上で結論であるのかも知れない。」<sup>1)</sup> というのは、実際に公刊され、私たちが手にとることのできるユカラのテキストは、金田一が採録した夥しい数のテキストの何分かの一である。<sup>2)</sup> ところで、その公刊されたユカラを通観してみると、登場する女性たちは実にさまざまに個性的であり、話の筋や展開に深くかかわりながら、男性の主人公たちに劣らぬ活躍をしている。ここでは登場人物の女性たちをヒロインと呼ぶことにするが、彼女たちの役割は決して脇役などというに留まらず、むしろ、話の本筋にとって肝要な存在であつて、主人公であるポイヤウンペの庇護者、許嫁あるいは花嫁であるが、しばしばポイヤウンペのために敵方の女性たちと戦う。また、普通には男性の首領（それをヒーローまたは英雄と呼ぶことにする）にはかなはずと云つてよいほど女性が同伴しており、彼女たちは多くの場合その妹である。それが敵方のヒロインであれば、彼女たちは互角の戦いを通じてポイヤウンペたちを苦しめる。また、ある場合には敵方の身であるながらポイヤウンペに心を寄せ、自らの兄弟や同胞に背いてポ

1931：191-203<sup>1)</sup>

イヤウンペの側に荷担したりする。地上で男性たちが入り乱れて戦うとき、ヒロインたちは敵味方共に天界にのぼつて女性の戦いを繰りひろげる。このようにヒロインの存在がいかに「副次的でないか」ということは、たとえば、テキストの構成を一瞥することからも明らかである。<sup>3)</sup>

### 3. ユカラのヒロインたち

ユカラに登場するヒロインたちを『虎杖丸の曲』[金田一 1931]の梗概を通して拾い上げ、その役割や特質をみよう。この原題Kuunne Shirkaは「虎杖（いたどり）がたの鞘」の意で、「鞘がそのようによく中を削り抜いてあることを褒めた名で」<sup>4)</sup> アイヌでは：殊に刀は身の護りの神として大事にし、その鞘には彫心・縷骨・魂を打込んで彫刻をほどこす。宝刀の名が、その鞘を以て名づけられている所以である」[金田一 1931：211]。虎杖丸では、「鞘の口元には夏狐、鞘いつぱいに鞘尻にかけて龍神の雌神、柄には狼神、鍔には龍神の雄神が彫つてあり、」<sup>5)</sup> この神々が持主に憑依して、持主の危急の際には、これらの形象が生ける恐ろしい神となつて動き出し、敵を刺して殺し殺しするので、敵は『おばけ憑・魔物憑』と恐怖する。故にこの語を以て本篇の題としている人もある。即ち詳かには『虎杖丸の曲、変怪の憑依、妖怪の憑依』なのである」[金田一 1931：212]。伝承者ワカルパ翁から筆録されたこの一篇は7035

行を数え、金田一はこれをつぎのよう九段に分けている。結

末ではポイヤウンペの遠征はさらに続く気配を見せてはいるもの

の、実際にはそれより先は伝承されておらず、主人公の英雄

は故郷へ凱旋しないままでいるらしい。〔金田一 1931：212-

213〕

### 第一段 序曲 生立ちの巻

第二段 第一戦記、石狩の巻（黄金のラツコ戦乱の因となる事）

第三段 第二戦記、オマンペシカの巻（異国に父の代の故旧あるを知る。）

第四段 第三戦記、酒宴の巻（シヌタップカの諸英雄毒刃に斃れ虎杖丸始め威靈を顯す事）

第五段 第四戦記、カネサンタの巻（ウカムペシカ女虚病の事）

第六段 第五戦記、禿顱の巻（出獵して虚病媛を奪う大敵に逢う事）

第七段 第六戦記、チワシペツの巻（チワシペツに虎杖丸再び威靈を顯す事）

第八段 第七戦記、メナシサムの巻（老婆に化けて変怪の憑依の真似を演ずる事）

第九段 第八戦記、アヅイサラ媛の巻（虚病媛再び英雄の危難を救う事）〔金田一 1931（1967）：ix〕

『虎杖丸の曲』梗概—登場するヒロイン

### 第一段 扶養者＝まま姉、花嫁候補＝石狩姫

山砦にまま兄とまま姉に私は育てられていた。左座の白木のひと間には美しい髪のカムイオトプシがいる。あるときつぎのような噂が聞こえてきた。「石狩の河口に黄金のラツコが出没し、石狩彦が近隣に音信を飛ばした。『黄金のラツコを潜りて手捕りにした人にはわが妹にわがもつ宝を一つに束ねて献げるであろう。』それで石狩の河口には近郷、遠村のたいしうが集まり、無数の仮小屋が建っている。」

### 第一段 ポイヤウンペ黄金のラツコを捕らえる

ある夜、宝の積み重ねから箱を下ろし、錦の小袖、神刀、黄金の鈎帶、黄金の小兜を取り出して、身に着け、外へ出た。海へでると「何の神の我に憑きてか、我が頭上りんりんとして鳴りとよみ」、石狩の郷の近くへ我駆けしめらる。黄金のラツコが波間に刀影のごとくに泳いでいる。

東明の朝があけると、ポンチュブカ人が、次にはレブンシリ人が黄金のラツコの泳ぐ渦汐へ潜ったが間もなく、骸となつて岸に寄りあがつた。我みずから跳りこみ、ラツコの喉を掴んで、天空の上へ引き上げ、直ぐに我が山城として疾走。シヌタップカへ戻り、祭器の並みいる上へ黄金のラツコを投げ棄てる。我が姉、まま兄も起きて、祭器の方へ目を向けると、忽ち、形相

が変わり、憤怒を露にした。美しい髪の持ち主、カムイオトプシは「われらの養育する神人の打ち取つたに違ひない。こうなつてはわれらの郷は無事にはいられない。昔あつたことが、新たに今また持ち上がるだろ。弟の所業のせいで戦が起るだろう。」

### 第三段 宿命のヒロイン＝石狩姫、戦の先導者＝まま姉、巫者＝ラコ憑き＝金山丹姫、異国に嫁いだ媛＝シヌタブカ媛、巫者＝オマンペシカ媛

そのうちに、つぎのような風説が聞こえてきた。「石狩姫が食事もせず、『いかなる人が黄金のラッコを打ち取つたのだろうか、もしそれが神ならばわれは死んで嫁ごう、もし、人間ならばどこのたいしようであるにせよ、わたしの夫としよう』と言つてゐるとか」。

ある日、浦づたいに戦いの物音が起り、まま姉が様子を見にいって、引き返してまるで男のように手をあげて告げた。「黄金のラッコを我らが育ててゐる神が殺したばかりに戦になつた。石狩人がおのが妹の恨みを晴らさんと、周囲の島々と語らつて、わがシヌタブカへ皆殺しに攻めてきた。」まま兄とカムイオトブシ、まま姉は「みな共にこの戦を迎へ討たん」といつて、出て行つた。

私は黄金のラッコを取りに忍び込んでくるチュブカ人、レブンシリ人を迎へて太刀で打ち割る。その間にもまま兄、まま姉、

カムイオトブシは勇ましく戦い、「数多の神の死ぬ音、絶え間なく天上に蘇る死靈、全く死にゆく死靈ひとつ響きにひびきくだけてこの国土の地の底を震い動かす」。何者かが高窓に降りて、黄金のラッコに手をかけ、風のよう逃げ、里川の河口の、入り江の口遠くに大きな戦船を指して疾走する。それを追いかけ、黄金のラッコを取り戻し、ずたずたになりたるポンモシリ人の屍を我打散らす。

気がつけば、大海のまつただ中にいて、沖の国人（repunkur moshi）の島ちかく、岬（Omanpesh）の近くの狭き真砂路…そのオマンペシには夥しい邑落が立ち並び、その浜見の櫓の上に誰だか首領が大声で話してゐる。「昔あつたことが今また起つた。そのむかし、金山丹姫（Kanesantumai）は黄金のラッコの牝牡つがいのラッコの憑いた女であつた。牡のラッコを石狩川の河口に潜つて餌を求めさせた。そのために起つた戦が、このオマンペシに押し寄せ、わが父シヌタブカ人の味方をして辛酸を共にした。それで、シヌタブカ媛がこのオマンペシカの郷に嫁いできて、このわたしと妹がいる。妹のオマンペシカ媛は土中に埋もれたるものを巫術（euse）もて顯わし、雲なかに隠れたるものをも巫術でくだす、たいへんな巫者で、前から石狩媛のラッコが戦の因になるということを予言していた。我が村人たちよ、本島人（yaunkui）なる首領ポイヤウンベは、本島人ではあるが、わが縁者の首領であるから、わたしは彼の味方となつて戦おうと思う。我が村びとどもよ、本島人である弟を

敵視するなら、このわたしは成敗してくれるぞ。」

そこへ、何者かが我を後ろから抱きとめ、黄金のラッコを取  
りながら、「さあ、シヌタブカなる我が兄、われこそオマンペ  
シカ媛、黄金のラッコを渡しなさい」という。振返つてみると、  
にくき石狩媛であったので、太刀を振るうとちぎれたるむくろ  
が落ちころげる。次いでチュプカ媛が黄金のラッコを取ろうと  
したので、ちぎれたるむくろをわれ斬り散らす。さらに戦つて  
いると、またしても、後ろから引っ張るもののがいて、打ちみれ  
ば、今こそまことのオマンペシカ媛、沖の国の妹にちがいない  
らしく本島びとのまみを我に据えたり、きのう今日、女衣のひ  
もを胸高に締めたる美しい少女、いづこの郷、いづこの国に育  
ち居りたれば噂にも聞かざりしならん、世にも美しさ。ここに  
始めて黄金のラッコを渡し、右手に我が佩く太刀を縦横無尽に  
ふり回す。

やがて、攻めくる敵を皆殺しにし、沖つ國の兄とその妹どう  
ち揃つて、勝鬨をあげ、「これから沖の国人が一齊に、我が世  
の限り殲滅戦にお寄せてくるから、汝のシヌタブカへいつて  
一休みをしよう」と本島の国を目指してまつすぐにのぼり、我  
が山城に入る。見ると、我が養兄、養姉、カムイオトブシが全  
身に鎗や刀傷を負つて伏しているが、一齊に立ちあがつてきて、  
勝鬨をあげた。

ある時、養兄が「父祖の幣 (chipa) も寂れた。息休みにも酒  
を醸して祭りをしよう」という。酒宴が佳境にはいったときには、  
沖からひた寄せに少なからざる神々 (kamui) 寄せるけはい  
が鳴りとよむ。誰か気づくかと見渡したが、男子のうちににはひ  
とりもなし。女子ではオマンペシカ媛、沖の国の妹だけが神々  
ののほりくることを悟つたようで、強き息吹もてその唇の上を  
ひゅうひゅうと鳴らせば、登るけはいのありたる神々、みな悉  
く四方の海の上へ追いやられた。するとすぐに空がうち晴れた。  
またしても、酒宴のなかばに山手をひたよせにたつた二人だけ  
下り来る音がする。いかなる勇者 (rametok) が下りてくるの  
か、大地の底が揺り動き、わが山城は大風のために柱も桁も折  
れんばかり。酌をしていたオマンペシカ媛が驚きの声でこうい  
つた。「わが兄ぎみたち、山手の方からまつしぐらにたつた二  
人ばかり下りてくるが、息吹のひつかかるようすがない。戦の  
命数 (semak) を占つてみると、わが兄たちの誰も生きてはい  
ない。シヌタブカのわが小兒だけが助かりそうだが、それも尋  
常のことではないらしく、神 (kamui) のごとき方の取佩く太  
刀が日の入る真西、血の靄の中に柄がしらの銀鉢のほの見ゆる  
のみ。さあるからには神のごとき方なるわが兄、その人も生き  
てたまうべきことにてありやもわれ知らざるものなり。」

そのとき、入ってきたものは、胴体のおもて数々の巖の沢、ぎ  
ざざざざし、沢々のあいだ数々の岩かどいがいがと立ち、後に入  
れるは小袖のおもて水かねの光ざらざら滴り、小袖のおもて毒

汁の滴る角々いがいがと立ち角々のうえ毒汁のひかりぎらぎら  
滴り、いかにして殺すべきかも我が知らぬもの。このシララペツ  
ツ人とカネペツ人が「まずは腕力の闘いもて我らの勇を競べよ  
う。取つ組み合いの闘いをしよう」という。

養兄が名乗りをあげ、組みあつたが、枯草のように斃れ伏す。

ルエサ二人、ルペットム人、シャンプト人、次いでカムイオト  
ブシ、余市人、若きわが兄、おなじように斃れ、沖の國の兄才  
マンペシカびともまた然り。

そのとき仇討ちすべきわれなれば猛き足踏を踏み延べ：格闘  
するも息の穴も塞がり細き肋骨は折れ碎け、太き肋骨は折れ撓  
む：虎杖丸の鞘の尻を我高々とあげ刀の柄がしらをたたみの上  
にさかさまにした、すると柄がしらの狼神身をよじらせて牙の  
尖をむき出す。鍔のふちの上の龍神の雄神は角を高々と起こし  
立て、鞘の鯉口の夏狐のばけものの恐ろしげなる無毛の怪物耳  
のさきと尻尾のさきとに少しばかりの毛の衝き立ちたるが鞘の  
口元に身をよじらせて突つ立つ、鞘の上の龍神の雌神は鞘いつ  
ぱいに絡みつき、鞘の末に尻尾を振り立てて靈鎧のごとく閃々  
と光りつつ首長の脾臓を真直ぐに指した。ここに至りて、神々  
の形象（かた）が鞘の上に生ける神々となり鱗を高くたてつつ  
首長の脾臓を尻尾もて刺す音ぎゅうと鳴り、シララペツ人の  
死靈の去り行く音が鳴りとよむ。カネペツ人もまた然り。

その時に毒ぐしの我折れ込まれてありければ毒身のうちへ回  
り、激しく生き、氣のうつらうつらてきて、絶え入る鹿の音

### 第五段 ウカムベシカ媛・虚病媛||敵中の花嫁、戦いのヒロインたち

そのときに、沖の方から大きな叫びがつぎのようについて。

「シヌタープカ人が黄金のラッコを逃さじとして、そのためには  
マンペシの郷へ戦が延びゆきたるとき、ウカムベシカ人が下郎  
の鬼もろともに手伝いに行かば、本島の首領も危ういので、ウ  
カムベシカ媛は虚病、俄病で兄を欺いたので、ウカシナペシカ人  
は手伝いが遅れた。ところが、カネサンタに酒宴があり、ウカ  
シナペシカ人下郎の鬼もろとも殺されはしたが、神に戻されて生  
き返り、神に恵まれて生き返り、カネサンタに帰ると、そこで  
酒宴があり、チユブカ人、レブンシリ人もやからを連れて來た。  
そのとき、若きチユブカ媛、カネサンタ媛、ラッコが憑ける媛、  
いづれも靈巫(nupurupar)なれば、ウカムベシカ媛の虚病、俄病  
もて欺きたることが露頭し、それがために虚病媛は縄もて縛め  
られ梁の上にしばりつけられ熱湯の責め苦を受けている。」

そこで、われ養姉と沖の國人の妹と余市媛を一度にふり飛ば  
し、戸外へ下りて、わが郷の濶の遙かなる口へ起つ。海づらの  
上に若きおとめをわれ捨い上げて、鳥の潜ぎをまね、海の潮の  
ただ中を行き行きて、みると沖の嶠のそば、大きな人江のそ  
ばに夥しき郷あり、少なからざる首領だちの憑神、郷の上空に

をわれ立て、魚のはたはたと翻りよろよろと血迷い走る様をし  
ていた。余市媛、沖つ國の妹、養姉が抑えて、介抱する。

ひとむらの雲をたなびかせ、おびえ騒ぐ神々のおびえ騒ぐ音相響き鳴りつらなる。

郷の近くにわが心を押し鎮め、「何の神が我に憑くともわがために音を静め下さるべし。」すると、わが憑く神々は四方の雲の根に音立てて去りゆきたり。郷のほとり近くへぬき足さし足で歩み寄ると、その大きな家の内には饗應の物音、酒宴の物音が騒々しい。のぞき見るに、いづれの目つきも見覚えのなきものども相並び、憎らしきチユープカ人、レブンモシリ人、ポンモシリ人、ウカムベシカ人、下人の鬼と我のはなしでもちきり。カネサンタ媛、ラツコが憑ける女はこの女であろうと思われる女が酌をして回っている。

そのとき、梁桁の上で人の跳ねる音がして、こう言う声がした。「死をいやがるわれにてあらんや。疾く殺してたまわれかし。いづれにしてもシヌタプカの神のごときますらおが我を土より掘り起こしにきてくださるならば汝ら生くべきものにはよもありだじ。」われ振返りたりしに、虚病媛の美女、縄目の間に全死の人にてありながらもさし出づる日の神々しきその顔ばせ眩しき光をさいたりけるに愛憐の情を我もたらしめらる。

我立ち戻り、大地を踏みにじり戸の垂簾を引きちぎり、家の左座へ猛き足踏みを踏み張り、上座にあぐらをかくと、ラツコの憑ける女なるカネサンタ媛、多淫の情をよせて大盃で酌す。われ飲むに酒のよろしさ感嘆す。幾つもいくつも重ねてから、虚病媛の美しい少女が縄目のいましめをおもむろに切り、爐のそばにわが膝のうえに頭をさせ、祈詞を祈る。

そのときどの首領やら、「シヌタプカ人と虚病媛のウカムベシカ媛との花嫁花婿の見参ぞ、かれれば首領たち皆のために何か余興を見せらるべし。」われ起ちあがり酒筵の間を手を衝いて四つ這を演じ、酒席の間をわれ爪もて搔きはだけたり。と見ると虎杖丸の鞘の口なる夏狐、狼神、龍神の雄、龍神の雌の神の形象たち一齊に鱗を高くおこし立て、夏狐の怪物にわれ成りて一人跳ね跳ねしてありたり。左座にいた六人の大将が喉ほとけの下を我が爪もて切り、右座にいた六人の大将が喉ほとけの下を我が爪もて切る。駆けながら燃えさしを我足もて蹴ちらす。座敷の菅畳に焰燃えつき、そのときわが憑神、嗔れる神の荒れ狂う風、家のなかに渦巻き、さしものこの大家を焰が取つてしまふ音鳴りとよむ。

戸外に駆け出づれば、外には虫の湧くよう、洪水の溢るるさながらに、後方の部隊、前方の部隊元気を奮い起こしいたり。驚くべし、わが妹は餓えたる鳥のよう自身をしなし、「数々の拙き沖の國の者たちよ、汝らどのやつとて助かるべきものにはあらざるものぞ」という。——(戯いの描写)若きチユープカ人、レブンモシリ人を我殺したり。そのときラツコの憑く女、チユープカ媛、ポンモシリ媛、レブンシリ媛、悪石狩媛一齊に虚病媛なるわが妹もろとも天空の上女同士の戦、天空の上へ行きたり。首領たちみな一緒に擧げる雄誥びの声相共に起り、仇討ちせんとて仕返しにくる。今こそまことに人間の戦いにはあらず、

神の戦いを見たらんにはかくやあらん。

その後、空晴れ、それとともに虚病媛なる我が妹歎びの声をあげて降りて來り。しかれどもかばかりの美しき人どこもかしこも掩い隠すところ更になし。おのがからだの上へ息吹を掛けおのが身体じゅうを癒す。小さき傷は瘡おちてすぐに癒え、大きな傷は瘡かかりて癒えていく。我が身のおもてへ息吹かけわが元の身体につくるい直したり。ここにおいて本島の国おもてへ我らあがりたり。

#### 第六段 略奪される花嫁＝ウカムペシカ媛

虚病媛のわが妹を妻にして暮らしているが、ある日のこと、不意に山へ行きたくなり、姉に装束を所望すると、「滅相な、まことの大将が山行きして事なくすみたることはない」というのを、強引に出させて、草織の脛当てを着け、やなぐいを背負い、弓矢を手にわれ立ち出る。川伝いに水上の奥山までいくと、思いもかけず虚病媛、わが妹の叫喚の声が耳に入る。急いでとり、立木の陰へ歩みよると、虚病媛がさかんに抵抗しているが、相手は赤糸のどこひとつない男が、「ボイヤウンペに遙か超えたるチワシペツびとの二人兄弟である。わが弟はボイヤウンペを汝夫にもつよりは遙かに過ぎ、汝ら相婚はば神より飲ましめられ、神より食せしめられるべきである」という。そばを通りすぎるときにはが妹のどこかを掴んで投げ飛ばし、チワシペツびとに太刀を振るう。こうして天空にまで追

つて行こうとすると、虚病媛を投げ飛ばした辺りに潜んでいたメヨイ小袖の六人の童子、ケチャク小袖の六人の童女が立ち上がり、彼女を攻めるが、やがて、虚病媛はかれらを打ち仕留めたるものらしく思われたり。(ポイヤウンペとチワシペツ人の凄まじき戦いは延々とつづき)われ覚えなし。死にたりしものにや眠りたりしものにやわがこちらもつれてしまい我にかへりたりし時にはわが撃ちたるやつはただ血潮のみ地にのこしとどめてその行くところを我は知らず。

#### 第七段 遠征

「如何なる人がチワシペツびとの弟なるものであるというや?そこまで行かずに汝引き返さんか。若しもざることあらんに臆したるなりといはれもやせん。」異国の海と内地の海と海と海のあいの海にわれ到りつつ打眺むれば:チワシペツの郷、夥しき郷のいっぱいに立つる煙は常世の狭霧の如く郷の上に立ち込めたり。郷の中央にきりたる島と見まがう程の大きなる家あり。家のなかへはいり打見るに右座に美しい乙女糸を紡ぎながらいたり。久からずしていかなる勇者はいり来るにや:入る前に炬火のやうなる人間の光が家中へ刺し来たれり。向こう座にわれ長々とからだを伸ばしていね死にそうなる目付きをわれ伴り装いたり。赤顛の:類い無き勇者六輪の耳金のつく大鍋いっぱいの飯をつくりたりけり。その間に(兄の)赤顛の戸口より荒々しきことばを發して、「我が弟よ、汝斬つてしまは

ばよかりしに、汝何すとて（仇の）骸を生きかえらしめている  
か」さう云いつつ右座に高枕をかはせたり。さるほどに虎杖丸  
の太刀の柄かしらの狼神、龍神の雄神、夏狐、龍神の雌神が生  
ける神々となり：その間に大鍋を我すつかりからっぽに食べて  
しまいたり。するりと霞の如くに我起き上り横座の小人へわが  
太刀を振る。禿顎の切斷したる屍をわれ切りちらす。若きおと  
めへわが太刀振ればわが太刀のさきざきをひらりひらりと翻り  
たり。騒ぎを察して集まつてくる村びとたちを片づぱしから斬  
り、火を放ち、外へでるとそこで槍を林のように立てた別隊を  
相手に：雜人どもをば犬の虫けらの噂を立つらん者共を残らず  
屠り絶やす。（兄の首領とその妹との戦いはつづき、そのなか  
で私は妹を慘殺する。）悲憤にかきくれたる首領ことばを発し  
て、「ここ一足も動かずには肝の切り合いをして互いの武勇を比  
べ見るべきにてあるなり」云いたりければ、我応と答えを与え  
たり。（かくて凄惨なる斬り合いがつづき）その間に赤顎の弟、  
神のようなる人が、「命を惜しむ我ならんや。たといわれ死す  
ともメナシシャム村汝のゆく先、首領だちそこに相集まりて汝  
を討たん、その首途に酒宴を設けて戦の前にめいめいの護り神  
を祭りいるなり」という。

第八段 ポイヤウンペの遠征、老婆変身  
メナシンシャム村をめざして沖びとの国國のかみへかみへ神風  
を驅つてわれ走りたり。その大きな郷は港町にことならず。

：くさめの鼻汁を咳きの鼻汁を我みづから塗りつけ我びよんび  
よん跳ぶに、わが狹き額わが狹きひたいさと圧しつぶされたる  
醜き老婆そのように我あり。：酒宴のある家の家ちかくにわが  
つく杖の音どたんばたんばたん。小手打ち叩きて我（老  
婆の）まねし、「御酒だけにてさへも尚結構なるとなるに鹿  
を捕られたさうなこれは又ひとしおのこと大よろこびをして本  
当にまかり出ましたよ。」我云いければ酒宴の上の首領みな打  
ちうなづきて、「さすがは首領の夫人にて饗應を喜びめでらる  
る」。首領だちみな鹿の生肉のまま食べらるるところを私にの  
べてくれたり。食べながら一座の上に我が目をそそぎて打ちみ  
るに、憎さも憎いポンモシリびと、チュブカびと、レプンシリ  
びと、カネペツびと、シララペツびと、カネサンタびと、ウカ  
ムペシカびと、メナシシャムびとの兄弟の首領武勇ぶりなり男  
ぶりなり感歎すべきがいたり。—酒宴の余興にみなが変怪の憑  
物の本島の首領が演じたる有様をまねする。—最後に「貧しき  
老婆に我はあれど…見せて進ぜましよう」と我起ち上がり、貧  
しき老婆が着ていたものをかなぐり捨て、手を地について四つ  
ん這いになり：変怪の憑依をまねたり。ここにて大騒ぎになり  
皆をあげての戦闘となり、首領たちは次々に倒される。途中に  
オマンペシカびとの兄が棍棒をもつて援けにくる。かくて敵を  
殲滅し、「沖の国の兄もろとも島根の上に腰打おろして掛けつ  
つわれら休らいたり」。

第九段 策略家Ⅱペシユヅル女、戦うヒロインⅡア。ツイサラの少女

折ふし沖の国の國のさきに少からず神の雲むらむらと起ちこなたをさして来る。打見れば噂に聞きたるア。ツイサラびと兄弟

の首領と美しき少女姉妹の女にちがいなく…。ア。ツイサラびとの年長の首領が云うようは、「ペシユヅル女がひそかに我等のもとに来りてア。ツイサラびと兄弟の人々よ、汝等のみ本当の首領を打つべきものにわれ汝等を推す。本島人の首領を汝等が殺

さばこの地上に汝等の評判があがるであろう」。年下の首領が猛き力足を我に踏みのべ猛き力足を我も踏み伸べ。我が側には沖国の中とア。ツイサラびとの年長の方とが互いに飛びかかりたり。

—かくて壯絶をきわめる五臓の裂き合いがはじまる。—そのときあたかも本島より神のせまり来る音鳴りとよめり。わが心怖じおそる。疾く来るものとおぼしくして戦いの場へ一団の雲翳を打ち懸け、樹木の摧くる程の物音頭上を起す。打見れば、

女人かこれ何というその美しさなるらん、巫人（nepuri）の額をおのが髪の内に深く藏してにつこり笑みをふくみたり。「本島の首領オマンペシカ人もろともに今ははや汝等死にゆくところなり。さうなる暁にはわがペシユヅルの住人、わが兄達は世に惧るるもの無くなり汝等のお陰にて生きかえるべきわれらなり」とペシユヅル女とおぼしきもの云いたりけり。二人の少女の云いけるようは「ペシユヅルびとの女汝の悪心本島の首領と我兄だちとを相争わしめたる故に首領たちもろだおれにならん」としたまう。さするならばたとい賤しき婦女われらなりとも讐討ちのいくさをしていづれが勝つかを試みん」と二人の少女云いつつ天空に登りゆきたり。何れ劣らぬ巫女同士の相戦う声互いに息吹きを吹き送る声相交わる。

やがてア。ツイサラびとの少女の年長の方の死靈、年長の首領の死靈の昇る音なりとよみ、沖の國の兄が倒れ、ア。ツイサラ女の年下の女子の死靈が昇り、我らは戦い戦いてわが戦う首領を殺し果たせしことをばゆめうつつのうちにおぼえてあと分からず…みづから動くことも得せざりけり。そこへペシユヅル女の悪しき女、喜びの声をあげてわが側に下りて来たりて、「かばかりの男にてこの姫を妻にもつとさへ承知すれば生かし置きたきものを」と云いつつ、こういう歌をその喉元うつくしくひびかせてかく云いたりけり。「かほどの殿御を若し手に掛けておとこ冥利に盡きぬであろうか」そういうことば節づけて歌いたりけり。

折しも仄かなる神風はわがからだの上へ吹きさわり、我が見やれば虚病姫のわが妹いつもながら美しくその身のおもてさんらんたる光をさしはえにつけり笑みをうかべつゝ、さらりと綱をほどく音鳴りひびきたり。ペシユヅル女は手の上足の上に綱をかけられてしまいたり。虚病姫そのあとに強き息吹彼女の唇の上ひゅうひゅうなりよみがえる風となりてわが肝の末のびのびしたり。それよりして沖の國の兄の五体の上を息を吹きかけものとおりに癒し治したり。

あたかもそのとき虎杖丸の鞘の上の神々の象たちが生ける神となりいだし、夏狐の口よりは吐く雲真黒なる雲むらむらと生じわがからだの上をぐるぐる巻くように罩めて人間の形に虚病媛さへが我を見ることわれ知らず。そのときペシユヅル女いましめの綱よりするりと風のようにぬけ出で、そこにすぐわが居ることを気がつかず、つつ立ちて…居たり。ここに於いて女の両肩へわが手をやりて美しき下紐をわれ一つ一つほどき：凡そ骨のあるところをわれことごとく折くだき悪しき婦女の死靈の昇るおと鳴りとよみたり。虚病媛は「もはやあぶなき者なくなりてわれらが村へ帰りゆくべし」そう云いたりけり。そのとき「何處にある村がペシユヅルにてあゝは云いたるにや。すぐその手前まで来て行かずにわれら帰ることを若しやせば臆したりとやいわれんずらん」とわれ思いたりけり。（終）

#### 4. ヒロインの特質

##### (a) 巫者

アイヌでは一般に巫術をトウス tusu、巫女、巫者をトウスクルと呼んでいるが、おおまかにいえば、それはシャマンやシャマソの行為に当てることができる。ヒロインたちはいずれもそのようなシャマン的な特徴を具えている。巫術を示すもう一語はヌプル nupurで、沖の国ヒロインたちが「いづれもnupurpar（靈巫）なれば、ウカムベシカ媛の伴り病作り病もて欺きたる

ことが露顕に及びたり」とある。nupur-pe, nupur-maiはいすれも巫女の意で、「英雄詞曲（ユーカラ）に出てくる雅語」であり、「nupurはpan（淡い）に対する形容詞で、『濃い』・『強い』・『畏敬すべき』・『恐るべき』・『尊き』等の意を持ち、tusuより語義が広い」という「久保寺1977：10】。nupurについてはなお検討すべき余地が少くないが、テキストではこのカテゴリーのヒロインたちは、病気などの治療を行うのではなく、強力な巫女の虚病を露顕させるほどのもつと畏怖すべき靈力をもつた巫女として力量を発揮している。

さて、ヒロインたちの巫者としての特質には次のような点が指摘できよう。

##### i 透視、占いと予言。

地中にあるもの、遠隔から来襲する

るものを感じして、その災禍を息吹で予防し排除することができる。例えば、オマンペシカ媛は「土中に埋もれたるものを巫術もて顯わし、雲中に隠れたるものも巫術でくだす」ほどの巫者であるが、「兼ねてより醜石狩媛がそれを餌におびき寄せすというなる黄金のラッコ、戦いの因となるらんとす」と予言していたが、そのことが現実となる。息吹で傷を治癒する。この行為は話のなかで繰り返しみられる。たとえば、虚病媛なる我が妹、すなわち、ウカムベシカ媛は「おのがからだの上へ息吹を掛けおのが身体じゅうを癒す。小さき傷は瘡おちてすぐに癒え、大きな傷

##### ii

息吹で傷を治癒する。

この行為は話のなかで繰り返しみられる。たとえば、虚病媛なる我が妹、すなわち、ウカムベシカ媛は「おのがからだの上へ息吹を掛けおのが身体じゅうを癒す。小さき傷は瘡おちてすぐに癒え、大きな傷

は瘡かかりて癒えていく。我が身のおもてへ息吹かけわが元の身体につくろい直したり」という具合である。

iii 巫女の出現のさまは天空に黒雲を揺動し、激しい風雨を伴う。第九段の冒頭には次のようにある。「ア。ツイサラビと姉妹の女同胞の目つきを相ならべ、いとど美しきが巫女とおぼしく巫者の額を鬚髪のうちに藏しつつ、現形の憑物は蝙蝠の群の如くに彼の女のまわりに真黒になつてい、頭上には星のひかりばかりに陰形の憑物が明滅して過ぐ。」

iv 戦士・戦いの指揮 ヒロインたちの戦いの実際については余り具体的には描写されないが、たとえば、次のようにある。「何れ劣らぬ巫女同士の相戦う声互いに息吹きを吹き送る声相交わる。」(第九段) 彼女たちの戦いの場が天下世界であることにもよるが、それは地上でのヒーローたちの戦いと同時並行であつて、熱を帶びた語りはもっぱらこちらのほうに集中してクライマックスを構成するからである。地上での戦いがポイヤウンペ方の勝利になつておわるとき、天上からも味方のヒロインたちがわずかな艦橋を身上に降下してきて、戦いの激しさを想わせるしくみになつてゐる。

さらに、もう一つ注目すべきことは、戦さを先導、画策する役割がヒロインたちに付与されているらしいことである。エピローグでは養姉が戦闘を率先するさまが語られ、また、第九段の中ほどでは、ペシユ・ヅル女がア・ツイサラびとのもとへやつて

きて。ポイヤウンペとの戦いを煽動したという事実が明らかにされる。愚かしいことに男性の英雄たちには戦いをすべき正当な理由が見あたらぬにもかかわらず、「ゆえよし無しにいくさをしてよかるべきことあるべからざれど、ペシユ・ヅル女がいうことゆえに」といつて戦をはじめるのである。物語の展開が面白くなるのは、こうした邪悪な意図に反発する心が敵方のヒロインにわき起こり、それまでポイヤウンペに相対して戦つていた者が味方となつて戦がはじまるという番狂わせがあるからである。

#### (b) 略奪される花嫁 || ヒロイン

ポイヤウンペがこれといった理由もなく衝動的に山へ狩りに行きたくなり、養姉の制止も聞き入れずに山城を空けると、その隙に花嫁の虚病媛、ウカムペシカ媛が何者かに略奪される。相手はチワシペツビとの二人兄弟の兄であり、弟のために媛を奪つて行こうとする。「虎杖丸の曲」全体の流れのなかで、このプロットは後半の新たな遠征のための契機となつている。弟に娶せるに相応しい花嫁が他ならぬ虚病媛であり、相手は「わが弟はポイヤウンペを夫にもつより遙かに過ぎ、似合いの夫婦となろう」という。そして、次の段で、ポイヤウンペがチワシペツヘ乗り込み、相見えたその勇者は、「入る前に炬火のようなる人間の光が家中へ刺し来たり。打見る状、赤顔をその容貌にわれ感歎したりしが、何ごとぞこはそもそもいかに神より飲

み神より食むと云われたりしもの、帰神のようにみづからをし成し：かばかりの神かばかりのひとあべこべに（自分をば措きて）何を感歎するとしてかわが手前に目をひく懸けてはいり来る。

ポイヤウンペは相手が自分にも優る勇者であることに率直な感歎をもらすのであるが、「帰神のように」と訳されたアイヌ語riwak-kamui netは「男子の立派な相貌をほめる時の常套語である」と云う〔金田一 1931：47〕。英雄にとっての条件は相貌の気高さ、この世ならぬ美貌の神々しさにあるかのようであり、また、そのような英雄には似つかわしい花嫁がなくてはならない。

沖の国の勇者がウカムベシカ媛を略奪したにはもう一つの理由が推測される。それはこのヒロインが本来は沖の国人に属しているからで、本島人であるポイヤウンペの花嫁になつたこと自体に問題があつたからであろう。

(c) ポイヤウンペに味方するヒロインもしくは敵中の花嫁

ポイヤウンペの花嫁となつたウカムベシカ媛はまさに敵中の花嫁であるが、そうなつた元々の理由は判然としない。沖の国人でありながら、ポイヤウンペを攻勢する側に組みせず、虚病をもつてその兄たちの出陣を遅らせたということにポイヤウンペは義侠心を感じたというのか、あるいは、美しさと優れた巫者としての名望のために己の運命的な花嫁と直感したものかと

も解されるが、テキストでは明らかでない。

オマンペシカ媛について云えば、沖国レプンモシリのオマンペシの首領とその妹は、主人公ポイヤウンペにとつては従兄弟に当たる。この兄妹の母はかつてシヌタブカすなわちポイヤウンペの里村から嫁いできており、その理由は何らかの事情で兄妹の父の首領が戦でシヌタブカに同盟したからである。こうしてみると、本島人と沖国人とは截然とした対立関係にあるのではなく、後者には本島人に近縁な親派グループがあることが窺われる。それはまた、個人的なレベルにおいても可能性のあることで、たとえば、アヅイサラの少女は、ポイヤウンペとの戦いの最中に、その理由なき戦いがペシユヅル女の邪心によって仕組まれたことに義憤を感じ、この悪女を相手に戦いをはじめるのである。

#### 4. むすび

ユーラシアの英雄叙事詩のヒロインにもまた多様な特質がみられる。先ず、なによりもヒロインたちが英雄にもつとも身近な女性、すなわち、妹や妻たちであることはユカラとの共通した特質といえよう。ユカラで名だたる首領には、必ずその妹たちが随伴しており、このヒロインたちは一般に並はずれたシャマン的な能力を具え、その靈的な力によつて英雄にさまざまなか形で庇護や援助を与えるが、同じことは他の英雄叙事詩にも広

く認められる。たとえば、アムール川流域のトングース語系のナーナイの英雄説話では英雄の姉妹がカモやトビの姿をとつて危機にある英雄を援助するし、同じように松花江流域のホジエンでは姉妹が鷹（コーリ）となつて兄弟の危難を救う。また、

このようなシャマンであるヒロインは病氣や怪我の治療ばかりでなく、死者を蘇生させる能力も持ち合わせていることが少ない。その方法として、シャマンの衣装を着け、太鼓を打つて歌舞をすることが多いが、これは現実のシャマンの行為でもある。アイヌのユカラのヒロインたちの巫術がそのような形をとらない場合のあることはシャマニズムの方を考察する上で注目しておいてよからう。また、敵の接近をはるか彼方から

阻止したり、傷の治癒、ほとんど血肉を残さない英雄たちの肉体を蘇生させる方法としてユカラのヒロインたちが息吹をかけ

ことがみられる。息吹を吹きかけるという治療法は現実にはたとえば西モンゴルのシャマンでも行われている。

「英雄の花嫁、もしくは妹の略奪」というモチーフはユーラシアの英雄叙事詩にもっとも顕著な特徴の一つであるといえよう。それは恐らくは婚姻のルールである族外婚に由来するものと考えられるが、たとえば、サハやエヴエンキの英雄叙事詩では天界や地上界のヒロインが地下界の邪惡な存在であるアヴァヒによって花嫁として略奪され、その救出奪還のための遠征と戦いが物語の大きな流れをなしている場合がしばしばある。

ヒロインの戦士的な性格についてもユーラシアの諸多の英雄

叙事詩に例をみるとができるが、たとえば、ブリヤトの英雄叙事詩で男装のヒロインが兄勇者の完遂できなかつた偉業を成し遂げる一篇もあり、女勇者としての性格はいつそ積極的で鮮明である。

英雄のシャマン的な特質はヒロインに限つたことではなく、主人公のボイヤウンペは明らかに強力な巫者である。ただ、ボイヤウンペの巫術とヒロインたちのそれには明らかな差違のあることも確かであり、そうしたことも含めて、ヒロインの特質を比較検討してみるとユカラの考察にとって有効であろうと思ふ。

#### 注

- (1) まとまつたシリーズとしては、静内町文化財調査報告『静内地方の伝承—織田ステノの口承文芸（I～V）』（1991～1995）、（静内町郷土史研究会編）、『アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ』（I～XIII）（北海道教育委員会）がある。

- (2) 金成まつが自ら筆録したテキストとして金田一は92篇のリストを挙げている「金成・金田」（1966：13-19）。

- (3) ユカラの構成

出典 K-1：『ユーカラの研究』東洋文庫 1931（1967）  
KK-I～IX：『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』三省堂  
1959(1976)～1975

No.1 (K-1) 「虎杖丸の曲」

1 序曲 2 石狩の巻 3 オマンペシカの巻 4 酒宴の巻 5 カ  
ネサンタの巻 6 禿顛の巻 7 チワシペツの巻 8 ナンサムの

卷 9 アヅイサラの巻

No.2 (KK-I) 「虎杖丸別伝」

1 石狩の巻 2 第一戦記、シヌタブカ酒宴の巻 3 第二戦記、虚

病姫の巻 4 第三戦記、決闘の巻

No.3 (KK-I) 「ボノオイナ」 (Pon oina)

1 発端 2 客神 3 契り 4 天界行 5 寂界行 6 蘇生 7 い  
たゞめ 8 酒ほがい 9 嫁入り

No.4 (KK-II) 「ボロオイナ」 (Poro oina)

1 発端 2 乙女のかけ口 3 かけ口の処罰 4 姉神の大訓戒

5 ロタネチクチクとの戦い 6 シヌタブカびとの来援

No.5 (KK-II) 「ボロオイナ」 異伝 Poro oina (日高新綱)

No.6 (KK-II) 「ボロオイナ」 異伝 Kamui oina (日高沙流)

No.7 (KK-II) 「ボロオイナ」 異伝 Kamui oina (日高沙流)

No.8 (KK-II) 「ボロオイナ」 異伝 Kamui oina (日高沙流)

No.9 (KK-II) 「小和人」 (Ponsamouunkur)

1 シリペナ村の悪伯父 2 父の和国入貢 3 石狩村の苦難 4  
恵山崎村の旧縁 5 惡妹の最期

No.10 (KK-II) 「神造頭・神造胴」 (Kamukikarsapa Kamui kartumam)

1 石狩村の二兄弟 2 岩の兜のカムイカラサバ 3 キムハト  
彦・キムント姫 4 石狩姫への恋情

No.11 (KK-IV) 「朱の輪」 (Kemka karip)

1 発端 2 朱の輪 3 朱の輪姫 4 石狩村の戦い 5 オヤルル

村 6 決闘 7 オヤルル姫

No.12 (KK-V) 「ニシマク姫」 (Nishimakunmat)

1 発端 2 悪妹 3 魂魄の天驅けり 4 雲の梯 5 ニシマク  
姫 6 ニシマク村の酒宴 7 悪魔婆 8 悪妹の最期 9 ニシマ  
ク彦の最期 10 結び

No.13 (KK-VI) 「余市姫」 (Iyochiunmat)

1 発端 2 山狩 3 隙見 4 モイサム行 5 余市村へ 6 再  
びボンモシリ彦来る 7 曹司彦来る 8 伴鶴 9 シヌタブカの  
蟻殺戦 10 山丹村の戦い 11 旦鳥 12 終結

No.14 (KK-VII) 「耳輪の曲」 (Uchii ninkan)

1 発端 2 母の物語 3 石狩村 4 山上村 5 惠山崎村 6 い  
ハラルンサンタ 7 結び

No.15 (KK-VII) 「悪伯父物語」 (Akeusutsu iwarenesu)

1 発端 2 ニセイカびと来る 3 サンブツ村へ 4 ニセイカ村  
の戦い 5 帰郷

No.16 (KK-VIII) 「蘆丸の曲 詞のあやかし」 (Shupne shirika Itak-e-  
ikakar)

1 発端 2 ヨーラチチ 3 余市村へ 4 ボンビン村の大戦 5 ポ  
ノモシリ彦

No.17 (KK-VIII) 別伝

1 発端 2 ヨーラチチ 3 饗宴 4 余市村の郷 5 兄を張り殺す

6 ボンビン姫 7 ボンビン村の大戦 8 神髪彦物語 9 終段

No.18 (KK-IX) 「草人形・くわひとかた」 (Kina chishinap mun  
chishinap)

1 発端 2 フルピラ姫のはだか踊り 3 ポイシコツ姫の巫占

4 フルピラ姫懷妊 5 カラブト島の戦い 6 ウッカケシ村へ

7 ウッカケシ村の戦い 8 ホロカペツ村の戦い

No. 19 (KK-IX) 「八串の肉串いくわ物語」 (Tupesan kamimanit oumioshma)

1 発端 2 山行<sup>ゆ</sup> 3 兄たちエサンノット村へ 4 巫女たちの

山<sup>や</sup> 5 エサンノット村の戦い 6 貧しい兄との戦い 7 蘇生

4) 金田一『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』には『虎杖丸』の別

伝が収録されている。これは胆振幌別の金成モナシノウクの長女イ

メカノが伝承していたのを、金田一が1927年に旭川で採録したもの

である。序でながら、神刀名をもつユカラによる一篇『葦丸の曲

(詞のあやかし)』がある。これにはワカルパ翁所伝(金田一 1924年

採録)と、平村コタンビラ所伝、知里幸恵筆録(1923年)の別伝が

あり、『アイヌ叙事詩ユーカラ集』に収められている。

## 文献

### 奥田統一

1995 「織田ステノの英雄叙事詩」『口承文学研究』第18号

### 荻原眞子

1994 「マルゲンとアジの物語—ナーナイの英雄叙事詩」『口承文

芸研究』、第17号

2001 『ユーハシア諸民族の叙事詩研究 (1) —テキストの梗概と解説』(研究プロジェクト報告) 千葉大学大学院社会文化

## 科学研究所

### 金田一京助

1931 (1967) 『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』東洋文庫

1942 『アイヌ叙事詩 ユーカラ概説』青磁社

金成まひ、金田一京助

1959～1966 (再1976) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 I～VII、三省堂

### 久保寺逸彦

1977 『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店

### 中川裕、志賀雪湖、奥田統一

1997 『アイヌ文学』『岩波講座日本文学史17巻 口承文学2・アイヌ文学』

### Kuzymina E.N.

1980 *Zhenskie obrazy v geroiceeskem eposeburyatskogo naroda.* Novosibirsk

### Pukhov I.V.

1962 *Yakutskij geroiceeskii epos Oloncho.* Moskva

### Romanova A.B. I Myreeva A.N.

1971 *Folklor evenkov Yakutii.* Leningrad

### Surazakov S.S.

1985 *Altalskij geroiceeskii epos.* Moskva

### Zirmunskii V.M.

1974 *Tyurkskij geroiceeskii epos.* Leningrad

(2007年・2月・千葉大学)